

# An Article on Lu Xun "Abuse and Threats are not Fight"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/5230">http://hdl.handle.net/2297/5230</a>

## 魯迅「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」攷

下 出 鉄 男

### は じ め に

一九三二年十一月、《文学月報》第四期に掲載された芸生の長詩「漢奸的供状」を俎上にのせた魯迅の「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」（《文学月報》第五・六期合刊）は、馮雪峰らによって、中国左翼作家連盟（以下、左連と略称）内の極左的傾向に対する魯迅の不满を表明した文章とされている。確かに、左連が三一年一月に開催された中共第六期第四次中央全体会議において党のヘゲモニーを掌握した王明の極左路線の影響下にあったことは否定すべくもない。魯迅が左連を擁護するとともに、その成員の言動に承服しがたいものを感じていたことも、しばしば指摘される通りである。しかし、極左路線批判という観点から、魯迅の「漢奸的供状」批判のモチーフを把握しきれぬだろうか。

魯迅に批判の筆を執らせることになった「漢奸的供状」の孕んだ問題は、後にプロレタリア文化大革命において猖獗をきわめた「共産主義」的言説を深く蝕む「病」と不可分の関係にあるように思われる。文革時代、党及び指導者への盲目的な礼讃の一方で、「政敵」に対しては、誰もが嫌悪を覚えずにいらぬ醜悪なイメージを与えることによって、大衆の集団的憎悪を煽ることが「階級闘争」の常套手段とされ、その結果、革命の言説空間はむきだしの敵意と侮蔑に覆いつくされた。そこに現出したのは、未来を予感させるような如何なる兆候も見いださぬ荒廃した言語世界にはほかならなかったのである。魯迅が「漢奸的供状」を批判したのは、芸生と名のるその作者の独りよがりな「プロレタリア」的身ぶりが、プロレタリアートを彼等によっていつしか享受されるべき未来の文化から閉ざすものに見えたからではなかったろうか。本稿では、トロツキーの『日常生活の諸問題』（一九二三年）及び『文学と革命』（一九二三年）を手がかりに、「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」を単に左連史の一頁として扱うのではなく、共産主義運動における文学、芸術の意味を問い直しつつ、検討しておくことにする。

\*あらかじめ断わっておけば、本稿は、主に魯迅の「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」とトロツキーの右にあげた一つの著作を素材に「共産主義」的言説の生み出される要因をスケッチしようとしたものであり、必ずしも魯迅におけるトロツキー問題といったものに焦点をあわせたものではない。魯迅におけるトロツキーの文学観の意味については、長堀裕造氏の「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文学理論」(《日本中国学会報》第四十集・一九八八年)をはじめとする論文を参照されたい。

—

《文学月報》の編集人・周起応（周揚）宛書簡の体裁をとった「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」で、魯迅は同誌が「漢奸的供状」を掲載したことに抗議し、以下のように記している。

私は芸生先生の詩に大変がっかりさせられました。この詩は、一見して明らかなように前号のベードヌイの風刺詩を読んで書いたものです。しかし、比較してみると、ベードヌイの詩は自ら「悪辣」だと認めてはいますが、その中の最もひどい表現でも、笑罵にすぎません。この詩は、どうでしょう。悪罵、恫喝があり、更にくだらぬ攻撃もあります。実のところ、書かなくとも、いっこうにかまわぬしろものです。

「前号のベードヌイの詩」とは、《文学月報》第三期（一九三二年十月）に掲載された向茹（瞿秋白）訳「没工夫唾罵」を指している。トロツキーを標的にしたベードヌイのこの長篇詩を剽竊した芸生の「漢奸的供状」は、マルクス主義のタームを駆使して瞿秋白ら中共、左連の面々と論争を交えていた胡秋原を攻撃した作品であった。

只要「改造」和「發展」資本主義，

「逐漸變資本主義文化為共產主義文化。」

用不着普洛文化，

這是藍寧說的話（？）

放屁，尙你的媽，你祖宗託落茲基的話。

当心，你脑袋一下就變做剖開的西瓜！

資本主義を「改造」し「發展」させさえすれば，

「資本主義文化はしだいに共産主義文化に変化する」  
 プロレタリア文化など不要だ、  
 こいつはレーニンの文句だったかな（？）

バカ言え、こん畜生、おめえの先祖のトロツキーの言いぐさじゃねえか。  
 用心するんだな、おめえのおつむは、たちまち切り裂かれた西瓜になっ  
 ちまうぜ。

魯迅の批判の詳細は後に譲るが、トロツキーの「プロレタリア文学否定論」をひきあいに出して胡秋原の議論を攻撃した「漢奸的供状」の右の一節の中で、殊に魯迅を瞋怒させたのは、下線を付した箇所である。

周揚は、魯迅の手紙を《文学月報》に掲載するにあたって按語を書き、「これは貴重な指示であり、深く理解しなければならない」と記した。しかし、少なくとも一部の左翼作家は魯迅の芸生批判を快くは思わなかった。方萌、首甲、冰若、丘東平が連名で発表した「対魯迅先生的『恐嚇辱罵決不是戦闘』有言」（一九三三年二月《現代文化》第一卷第二期）は、芸生を弁護し、「マルクス・レーニン主義者」を標榜しながら左連に敵対する胡秋原に対する「辱罵」は、「羊頭を掲げて狗肉を売る革命の商売人」に対する断固たる闘争の一環であると評価、『『西瓜をぶったぎる』』といった恫喝への批判を含め、魯迅の意見は「極めて濃厚な右翼日和見主義の色彩を帯びている」と難じた。

後年、馮雪峰はこの間の経緯を以下のように証言している。（「馮雪峰同志關於魯迅，“左聯”等問題的談話」一九七七年十一月《魯迅研究資料》第二期）

周揚は王明路線を執行したことがある。一九三二年、彼は《文学月報》を編集し、（中略）芸生と署名された長篇詩「漢奸の自供」を発表した。恫喝と悪罵ばかり書きつらね、たいそう左翼的なこの作品を発表したことに魯迅は不満を感じ、「悪罵と恫喝は戦闘ではない」を執筆し、批判を加えた。

周揚が《文学月報》に「漢奸の自供」を発表すると、私は最初にこの作品を読み不愉快になり、周揚を訪ね批判し、口論になった。私はひっかえして瞿秋白に話した。彼もあのような文章に不賛成だった。私は文章を書き批判すべきだと考え、彼もこれに同意した。私の名義で書いても効果が小さいと思い、そこで魯迅を訪ね相談した。彼は「私がやろう」と言い、「悪罵と恫喝は戦闘ではない」を書いたのである。署名は魯迅がしたが、実際は左連を代表したものだ。周揚は魯迅の批判を受けいれつつ、祝

秀俠（変名は首甲）らを組織し文章を書かせ、魯迅を罵倒した。

「漢奸的供状」掲載の適否について周揚と言い争った馮雪峰から相談をうけ、その意見に同意した瞿秋白は、首甲らの論文が発表されると、魯迅の「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」を全面的に支持し、「恐嚇」を繰り返すばかりでは、「敵から理論的に応酬する能力がないと看做され、広大な民衆も敵の『理論家』のペテンを認識できまい」と指摘し、真摯な理論闘争の意義を説くとともに、「辱罵」をもって「真の攻撃と批判」にかえることは、「封建宗法社会の『文化遺産』の弱点を継承したにすぎない」と、芸生とその作品を擁護する首甲らの観点に反論した（『鬼臉的弁護』）。「辱罵」と「恐嚇」を弄するだけの攻撃を「思想闘争」と取り違えている彼等の魯迅に対する批判は、瞿にとって、「左翼日和見主義」の危険な兆候を示すものにほかならなかったのである。

右に引用した馮雪峰の回想は、瞿の言う「左翼日和見主義」を王明路線と読みかえることで、「漢奸的供状」をめぐる論争の背景をやや具体的に辿ってはいるが、その顛末が彼の語っているようなものであったことを大筋で認めたいうえでも、いかにも説明不足の感は否めない。ここで疑問点をいちいち列挙することはしないが、馮が言うように、瞿、馮、魯迅がともに「漢奸的供状」に好ましからざる傾向を見ていたとしても、この問題に対する三者の切り口が一致していたことには、必ずしもならないだろう。瞿の観点はともかく、馮の目には「漢奸的供状」と王明路線とがひとつに重なり合っていていたかもしれないが、かかる捉え方からもう一步踏み出して、より広い視野から「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」を読み直しておく必要があるだろう。何故ならば、「漢奸的供状」の孕む問題が王明路線の偏向とまったく無縁の現象であったと言うつもりはないが、しかし、それが王明路線の下でのみあらわれた固有の現象でなかったことも論を俟たぬからである。そもそも、民族、国家、階級、宗派など、人間の様々な集団的な営みにおいて、それと背弛する傾向をもった習慣、利益、価値観、思想に対する憎悪、敵意が猛威を揮う場面を歴史の中に見いだすことほどたやすいことはないだろう。勿論、「共産主義」も例外ではない、否、その徹底性、規模の大きさの点で、「共産主義」ほど集団的憎悪の力学をいかに発揮した例は、他にそうはないはずである。「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」で発せられた魯迅の問いが、冒頭で述べたように、「共産主義」的言説の歴史的帰趨という文脈において吟味されるべき理由は、まさしくここにある。

「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」からの引用を続けよう。

ことに我慢ならぬのは結びの悪罵です。現在、一部の作品には、必要もないのに会話中にたくさんの罵り言葉が書いてあることがよくあります。こうでなければ、プロレタリアートの作品ではなく、罵り言葉が多ければ多いほど、プロレタリアートの作品らしくなるとでも思いこんでいるようです。実際、よい労働者、農民の中には、めったやたらに人を罵ることなどしない者も大勢いるのですから、作者は上海のごろつきの行為を彼等の体に塗りつけたりすべきではないのです。たとえ人を罵りたがる無産者がいたとしても、それは悪い性癖にすぎません。作者は文芸を通じてそれを正しくいくべきであって、更にそれを煽りたて、将来のプロレタリア階級の社会にあっても、少しでもそりがあわぬと、先祖三代のことまであげつらい、いっこうらちがあかぬといったことは、絶対にあってはならないのです。ましてや、筆戦であっても、ほかの戦争や拳闘と同じように、隙を窺い虚に乗じて一撃で敵の死命を制してもかまいませんが、仮に騒々しくわめくことが『三国志演義』式の戦法であるとすれば、親父、お袋を罵倒してから振り向きもせずに立ち去り、勝利したと独り合点しているのは、「阿Q」式の戦法にほかなりません。

続けて「西瓜をぶったぎる」とかいった類の恫喝も、まったくの誤りだと、私は思います。プロレタリア革命は、自己の解放と階級の消滅のためであって、人を殺すためのものではありません。よしんば正面の敵であっても、戦場で死ななければ、大衆裁判があります。一人の詩人が筆を執ってその生死を判定してはなりません。(中略)我々の作者が革命的な労働者、農民をおどろおどろしい鬼面に塗りあげたことは、私に言わせれば、軽卒の極みです。

ここで私の興味をそそるのは、下層民衆きどりで「敵」を口汚く罵倒し、すごんでみせる芸生の「漢奸的供状」のような作品が、プロレタリアートの自己解放と階級の消滅という課題の実現にとって何の助けにもならないばかりか、「革命」後の社会を、敵意と侮蔑に覆われ、決して心を通じあわせることのない殺伐としたものにするであろうことを、魯迅が鋭く指摘していることである。換言すれば、新社会においてプロレタリアートの人間性を開花させるような如何なる文化革命のヴィジョンも、魯迅はそこに見いだすことができなかつたということである。

ところで、「辱罵和恐嚇決不是戦闘」を読み、すぐに思い起こされるのは、

魯迅が《語絲》第三十七期（一九二五年七月二十七日）に発表した「論『他媽的！』」である。罵る相手の母親（媽）を凌辱することを露骨に言い放つ「禽你的媽」に対し、「他媽的」のほうは、動詞「禽」（性交する）を省略し、人称も二人称（你）から三人称（他）に置きかえられているぶんだけ、やや婉曲な言い方になってはいるが、相当に卑猥な罵倒の語であることにはかわりはない。

人が言うように、牡丹が中国の「国花」であるとすれば、これ（他媽的——引用者）は中国の「国罵」ということになるだろう。

高門大族の堅牢な古き堡壘を攻撃するのに、その血統に狙いを定めるなどとは、戦略的に真に奇抜な手口と言えよう。「他媽的」という言葉を発明した人物は、確かに天才と言える——もっとも、卑劣な天才ではあるが。

「下等人」が成り上がる以前には、当然、さかんに「他媽的」を口にする。だが、運よく位にありつき、少しばかり文字を覚えると上品ぶりだす。雅号もでき、身分も高くなり、家譜を編纂し、更に始祖（名儒さもなくば名臣）を捜し出す。これ以後「上等人」になりますし、言行ともどもたいそう上品にふるまうのである。けれども、愚民も畢竟馬鹿ではない。とうにこのペテンのからくりを見抜いている。だから、諺にもこう言われているのだ、「口先で仁義礼智を言う奴にかぎって、心では、男は盗賊、女は売女」と。

そこで彼等は反抗して言う、「他媽的」と。

その「由緒正しい」血統をけがすことで、「高門大族」の權威を貶める「他媽的」という言葉は、魯迅にとって、一面では下層民衆の「反抗」の知恵の所産にほかならなかった。しかし、それが「国罵」として生命を保ち続ける限り、中国に門閥主義にとらわれた階層社会から脱する日が訪れないことも自明のことであった。

中国人には、今もって無数の「等級」が存在し、家柄、祖宗を拠りどころとしている。もし改造しなければ、永遠に有声、無声の「国罵」が存在し続けるだろう。

裏を返せば、「高門大族」を「他媽的」と罵倒することによって、溜飲を下げることは、皮肉なことに、既存の階層秩序に対する屈服を意味せざるをえないのである。「論『他媽的!』」の延長線上に「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」を位置づけて読むならば、既存の階層社会にその起源を持つ「尙你的媽」や「他媽的」といった言葉を「階級敵」に対する攻撃の手段とするような地点からは、階級の消滅を目指すプロレタリア革命の理念へと通ずる道筋を展望することは決してできないということに、魯迅の「漢奸的供状」批判のモチーフはあったと言えよう。「親父、お袋を罵倒してから振り向きもせずに立ち去り、勝利したと独り合点しているのは、阿Q式の戦法にほかなりません」という一節は、民衆が古い言語習慣に呪縛されている限り、よしんば「革命」が成功したとしても、階級の消滅はおろか、民衆の自己解放もありえないことを暗示しているように思われる。かかる魯迅の問題意識にいつそう明瞭な輪郭を与えようとする時、トロツキーの「言語の文化性をめざす闘争」（『日常性の諸問題』所収）は極めて示唆的である。

## 二

アイザック・ドイッチャーは、『武力なき予言者』でトロツキーの「言語の文化性をめざす闘争」の全文を紹介した後に続けて、大粛清時代の裁判のありさまを描き出している。

当時、検事総長は被告席の人びと、国や党の顕著な高い地位をしめていた人びとを、「おい、雄牛と豚の腹から生れた男!」というような言葉で罵ることができた。そして裁判官たちは、執念にとりつかれた判決を金切り声をあげて締めくくった——「この狂犬どもを銃殺に処す!」悪罵は法廷から工場、農場、編集室、大学の講堂へとどよめきわたっていった。

「トロツキーの記号学」（『トロツキーの神話学』所収）で山口昌男氏が引用する粛清裁判の被告の残した記録によると、訊問は「売女」という語に始まり、さらに「匪賊」「犬」「豚」など、ありとあらゆる罵言が浴びせかけられた。取調官は「彼の仕事を楽しくするために最善をつくし」、ことごとく「性的背景」を有する新しい罵言を発明し、「うまい罵声を案出したならば、彼は明らかに得意であった」という。「飛躍したい方をすれば」と断ったうえで、山口氏はこう指摘する、「スターリン体制は、悪罵を必要とする人間の秘かな願望を組織することによって成立した」と。

「論『他媽的!』」で「ロシアにもこの種の罵倒の方法が存在することになるが、さすがに中国のような巧みさと豊富さはない。従って、榮譽はこちらに帰する。幸い、これは、畢竟、大きな榮譽でも何でもないのだから、おそらく彼等が抗議してくることもあるまい」と記したように、魯迅は、罵倒の技術において、中国の右に出る国がないと考えていたようだが、興味深いことに、トロツキーも、一九二三年五月十六日の《プラウダ》に掲載された「言語の文化性をめざす闘争」（『日常生活の諸問題』所収）と題する短い論文で以下のように述べている。

罵詈雑言は、奴隷制度、さげすみ、人間の尊厳——自分の尊厳に対しても他人の尊敬に対しても——の尊重の欠如の遺産であるが、わがロシアの罵詈雑言は特別だ。ほかの民族にも、このような放埒で、ねちゃねちゃした、いやらしい罵言があるものかどうか、言語学者、博言学者、風俗学者にたずねてみる必要がある。私の知っているかぎりでは、そのような民族はまったくないか、あるいは、ほとんどない。ロシアの罵言の中には、下からは、絶望、すさんだ心、そしてなによりもまず希望も逃げ場もない奴隷状態が反映されている。だが、同じ罵言が、上からは、貴族や役人の口を通じて言われるときには、身分的優越感、奴隷所有者の名誉、土台の揺るぎなさの表現であった。諺は人民の知恵の表現だと言われるが、それは知恵だけではなく、無知や迷信や奴隷状態の表現でもあるのだ。「人の噂も七十五日」——とロシアの古い諺に言うが、その中には奴隷状態という事実だけではなく、奴隷状態への忍従が反映されている。ロシアの罵詈雑言の二つの流れ——太った咽喉に脂肪のついた旦那や官吏や警察官たちの罵言と、いま一つの、餓えて絶望し、疲労困憊した人々の罵言——は、ロシアの全生活を忌わしい言語模様染め上げてきた。そして、革命は、多くのほかのものも含めて、こうした遺産をそのまま受け継いだのだ。

トロツキーにとって「ロシアの生活を忌わしい言語模様染め上げてきた」罵詈雑言との闘いは、「不潔やしらみとのたたかいと同じく精神文化の前提であり、物質文化の前提」にほかならなかった。しかし、山口氏は、「トロツキーの訴えかけの論点はまったく正しい」としながらも、同時にそこに彼の「致命的な弱点」を見る。山口氏は、トロツキーのなすべきことは、「悪罵は一見歴史的な形をとっているようだが、実は、人間がそのインテグリティを保つための一つの手段であることを認めて、この表現形態をかつてはカーニ

ヴァルがそうしたような遊戯的空間に向けて解き放つような方向を与える」ことだったと指摘する。だが、遊戯の文化における重要性を認識していたにもかかわらず、トロツキーは、その「理想主義」と「西欧的基準から見て負であるものを正に転化させる土着的ねばり強さ」の欠如ゆえに、民衆的伝統の中で重要な部分を占める「悪罵」のエネルギーを否定的にしか捉えられなかった結果、民衆の「悪罵」の持つ「潜在的活力」を「告発者」の手にゆだねることになった。

スターリンの天才的抜け目なさには目をみはるものがある。スターリンは民衆の悪罵の持つエネルギーを過小評価しなかった。一方ではそのエネルギーに“トロツキー”という攻撃目標を与えて、他方では個々の人間の尊厳にたいする徹底的破壊を並行させる言語改良運動に、トロツキーの理論をそのまま、適用したのである。まるでスターリンは、今日のエソロジーの攻撃性の理論を予見したかのごとく、それを考えられる限りでもっとも非人間的なコンテクストで利用して大成功を収めたのである。

スターリン体制下の粛清とは、山口氏によれば、トロツキーが「非文化」的なものとしか見ることのできななかった民衆の「悪罵」の伝統を巧みに利用した残忍で低俗な政治的見世物にほかならなかった。ここで素描されているソ連邦における「政治言語」のあり方は、プロレタリア文化大革命にいたる中国における「共産主義」的言説の抱えた問題とも深く関わっていると言っている。「辱罵和恐嚇決不是戦闘」で、「将来のプロレタリア階級の社会にあっても、少しでもそりがあわぬと、先祖三代のことまであげつらい、いっこうにらちがあかぬといったことは、絶対にあってはならないのです」と記した時、魯迅は、「敵」に対してならば、どんなに下劣で野卑な攻撃でも是認されるような土壌を持つ左翼文学運動が、それが進んでいく方向の如何によっては、やがてその運動の最良の理念をも腐蝕させてしまいかねない大きな危険を孕んでいることを見ていたのではないだろうか。

「辱罵和恐嚇決不是戦闘」が、直接には蔵原惟人の日本語訳から魯迅が重訳したルナチャルスキーの論文「マルクス主義文芸批評に関するテーゼ」(「關於馬克斯主義文芸批評之任務的提要」)を踏まえて書かれたことは、既に指摘されているところであるが、それにしてもトロツキーの「言語の文化性をめざす闘争」と「論『他媽的!』」及び「辱罵和恐嚇決不是戦闘」との間に、互いに響きあうものが少なからずあることに、私は驚きを禁じえない。前者の

「ロシア」を「中国」に置き換えれば、それはそのまま魯迅の二篇の文章の適切な注釈になると言っても過言ではないように思われる。では、両者をその根柢において刺し貫いていた問題意識は、如何なるものだったのであろうか。

あらかじめ結論めいた言い方をすれば、芸生、周揚のみならず、瞿秋白や馮雪峰を含めた左連のほとんどの文学者にとって、批判の対象でしかなかった『文学と革命』においてプロレタリア文化に疑問を呈したトロツキーの文学観を魯迅は共有していたように思われる。些か強引かもしれないが、左連からの攻撃に晒された胡秋原の問題意識と魯迅のそれとの隔たりもさして遠くはなかったかに見える。勿論、『文学と革命』に浅からぬ関心を示したことがあったからといって、それが「プロレタリア文化」に対するトロツキーの否定的な見解に魯迅が手ばなしで共鳴していたことを意味することにはならないだろう。また、瞿秋白によって紹介されたベードヌイの例の「諷刺詩」で失脚したトロツキーがさらしものにされたことについて、これとって感慨めいたものを記していないことから見て、「辱罵和恐嚇決不是戦闘」を書いた頃には、少なくともトロツキーの政治的不遇に対しては、さして同情を感じていなかったようにも思われる。そもそも、魯迅が彼の文学の血とし肉とした外国の文学者、思想家は、周知のように、ニーチェ、アンドレーエフ、アルチバーシェフ、プレハーノフ、厨川白村、武者小路実篤、有島武郎など数多く、多くの研究によって明らかにされているように、彼の対峙した自国の歴史状況の諸局面との関係において、その受容のあり方の一つ一つに深く刻印された魯迅の問題意識も決して一様ではない。換言すれば、己を圍繞する状況との関係性から遊離して、没主体的に受容する対象に向かいあうのではなく、逼迫した歴史の諸局面との張りつめた関係意識を背負いながら、魯迅はそれらを噛み分けて己の肉声としていったのである。そうであってみれば、トロツキーの影響といったものに過度に大きな比重を置くことはできないし、その文学・芸術論がどのような状況の下で、如何に咀嚼されたのかが詳細に検討されねばならないことも、もとより贅言を要しない。魯迅がトロツキーの『文学と革命』から取り入れたのは、その「同伴者」論の観点であって、「プロレタリア文化否定」の立場は採らなかったという見解をとる研究者もいる。なるほど、魯迅が「プロレタリア文化否定」をふりかざしたことなど、一度もなかった。しかし、トロツキーの議論の結論を鸚鵡返しに繰り返すことこそなかったが、そのような結論へとトロツキーを導いた論拠は、魯迅の心に切実な響きをもって迫ってきたのではないかという想像を、私は捨

てきれないのである。

「言語の文化性をめざす闘争」とともに『日常生活の諸問題』に収められた「人は『政治』のみによって生きるにあらず」(《プラウダ》一九二三年七月十日)で、トロツキーは「プロレタリア軍事理論」や「『プロレタリア文化』を実験室的方法によってつくり出そうとする傲慢な構想」が「われわれの後進性に対する絶望が奇蹟への信仰に結びついている」ことの現われであることを指摘した後に続けて、「『プロレタリア文化』とかプロレタリア軍事理論といった形での、奇蹟への信仰や子供じみた魔法仕掛けを拒否すべきであった」と記している。ここで簡潔に述べられている「プロレタリア文化」の構想に対する批判は、周知のように、『文学と革命』の第六章にあたる「プロレタリア文化とプロレタリア芸術」において詳しく展開されている。彼が『文学と革命』における「『プロレタリア文学』『プロレタリア文化』といった言葉は危険である。この言葉は未来の文化を今日の狭い枠に押し込む虚構であり、それは展望をいつわり、均衡を乱し、規模を曲げ、そして危険きわまりない小集团的倨傲を培養するからである」という主張の論拠としたものの中で、特に私の注意を引くのは以下のような論点である。

トロツキーによれば、ブルジョワジーは「権力を握った時、彼らはすでに当時の文化を完全に身につけて」いたが、それは、ブルジョワジーの文化の発展が「多くの革命を経て国家権力を手中にするよりも数百年前から始まり、「封建社会の屋根の下」に置かれた時代にも彼等が「その内奥においてはすでに支配階級を文化的に凌駕し、権力の座につく以前に文化の推進者となっていた」からなのである。ブルジョワジーが権力を掌握した時、既に固有の文化を所有する成熟した階級となっていたのに対し、「ブルジョワ文化の基礎的要素をわがものとする以前に、権力を取るべく余儀なくされた」ロシアのプロレタリアートが「身につけているものといつては、文化を所有せんとする鋭い要求だけ」しかなかった。にもかかわらず、ブルジョワ文化が形成されるのに数百年の歳月を費やした事実を目をつぶり、文化から閉ざされてきたプロレタリアートの中に、「実験室的な方法」によって数十年もすれば彼等に固有の文化を実現することが可能だなどと考えることは、トロツキーに言わせれば、余りに馬鹿げた空想にすぎなかった。彼にとって、目下の主要な任務は、「新たな文化の抽象」などではなく、「この上なく具象的な文化運動、すなわち遅れた大衆が、既成文化のもっとも重要な要素を、体系的計画的に、そしていうまでもなく批判的に摂取すること」を措いてほかにありえようはずがなかったのである。

しかし、『日常生活の諸問題』に収録された一連の論文との関連で言えば、「遅れた大衆」が「既成文化のもっとも重要な要素」を摂取することを可能にすることもまた、大きな困難をとまわざるをえなかったはずである。言うまでもなく、「遅れた大衆」とは、まさしく「絶望、すさんだ心、そしてなによりもまず希望も逃げ場もない奴隷状態」を反映したあの罵詈雑言に象徴されるロシアの忌まわしい生活にどっぷりつかった「大衆」にほかならないからである。「わが国の労働者は——その最上層をのぞくと——ごく普通の文化的習慣や意識（身だしなみ、読み書き、几帳面等々のこと）を全面的に欠いている」（「人は『政治』のみによって生きるにあらず」という指摘からも窺われるように、トロツキーの考えでは、「大衆」の中に「もっとも簡単な文化的習慣」を蓄積する日常生活の領域における活動から始めることなしに、「新たな文化」を展望することなど不可能であった。「日常生活を変革するためにはそれを知ることが必要だ」で、彼は、「啓蒙の世紀」と言われる十八世紀に「政治体制や教会の問題のみならず、男女関係、児童教育等々の問題」にも興味を持ち、「生活をいろいろな面から考察し、それを合理化する、つまり『理性』の要求にしたがわせようとした」フランスの「ブルジョワ哲学者」の思想に言及しているが、彼等の合理主義的理論の実践への応用がごく限られたものであったことを指摘しているにもかかわらず、彼がその理念に魅了されていたことは否定できないように思われる。遂に実を結ぶことのなかった十八世紀フランスの啓蒙家の思想を現実のものにすることに、彼のめざす革命の目標があったのだとすれば、「理性」の要求にかなった生活を実現するまでの気の遠くなるような革命の工程において、「言語の文化性をめざす闘争」はごく小さな礎石にすぎなかったとはいえ、不可欠の課題の一つだったにちがいない。何故ならば、「婦人に対してさげすみの態度をとり、子供に心をくばることがない」といったことが「遅れた民衆」のみならず「責任のある人たち」の間でも依然として見られ、「高官」の一部は「右にも左にも『下品な表現を使う』のが自分の義務であるかのようにさえ考えており、それが、どうやら、農民との結合の道の一つであるとみているふし」すらあったからである。

「辱罵和恐嚇決不是戦闘」における魯迅のモチーフを考えるうえで、ここでおさえておきたいことは、ブルジョワジーによって生み出された「既成文化のもっとも重要な要素」の洗礼を受けることもなく、依然としてロシアの忌まわしい奴隷的生活に支配された「大衆」を前にしたトロツキーが、日常生活の領域における「啓蒙」の活動をロシアのプロレタリア革命にとって不

可避の主題と捉えていたということである。魯迅が『日常生活の諸問題』を読んでいたのかどうか、あるいはなんらかの形でその内容を知っていたのかどうか、いずれも詳らかではないが、『文学と革命』にかなりはやい時期に目を通していたことは確実である。魯迅日記によれば、彼は一九二五年八月に茂森唯士の邦訳（一九二五年七月・改造社）を購入している。

既に述べたように、トロツキーの主張のすべてが魯迅に影響を与えたなどとは毛頭思わない。だが、『文学と革命』でトロツキーがああ「プロレタリア文化」批判の論拠としたもの——ロシアのプロレタリアートが「ブルジョワ文化の基礎的要素」さえ我が物としていない現実——の重みを、中国革命の隘路に身を置いた魯迅が体感せずにはいられたであろうか。更に言えば、トロツキーの「プロレタリア文化」批判そのまま繰り返してこそいいが、彼の考える「無産階級革命文学」とは、トロツキーには、その活動を欠いては「プロレタリア文化」など所詮画餅でしかなかった「啓蒙」の課題をも包みこむものだったのではなかったか。

### 三

「左連五烈士」事件（一九三二年一月）の直後、魯迅はスメドレーの求めに応じて《ニュー・マッセズ》に寄稿した「黑暗中国的文芸界的現状」で、「現在、中国において、プロレタリアートの革命的な文芸運動は、実際、唯一の文芸運動である。何かとなれば、それは荒野の中の萌芽であり、それ以外に、中国には既にそのほかの文芸は存在しないからである。支配階級に属する所謂『文芸家』は、所謂『芸術のための芸術』や『頹廢』的な作品すらも生み出せぬところまで腐れはて、今や左翼文芸を制圧しているのは、中傷、弾圧、拘禁、殺戮のみであり、左翼作家と対立しているのは、ゴロツキ、スパイ、走狗、首斬り役人ばかりである」と記している。左連の運動に対する懐疑的な見方を折に触れ語ってきた魯迅をして「プロレタリアートの革命的な文芸運動は、実際、唯一の文芸運動である」とまで書かせたものは、ほかならぬ「左連五烈士」事件の衝撃とその凶手への憤りであったろうが、唯一とは言えないにしても、人間の解放の課題への数少ない真剣な取り組みの一つとして、左連に主導された「無産階級革命文学」の運動が魯迅の中で重みを持っていたことを、右の一節は示している。事実、「第三種人」論戦などで見られるように、彼は左連に絶え間なく加えられる「批判」、攻撃に応戦し、その活動を擁護したのである。

「第三種人」を標榜し、胡秋原と瞿秋白との論争に加わり、左連の「文芸

大衆化」の方針を揶揄した杜衡を、魯迅が批判したことは周知の通りである。「文芸大衆化」は、一九三一年十一月の左連執行委員会において決議された「中国無産階級革命文学的新任務」(一九三一年十一月十五日《文学導報》第一卷第八期)に新たな方針として盛り込まれ、連環図画、唱本などの通俗的な文芸形式を利用して、革命思想を大衆の中に浸透させることが提唱された。杜衡には、「文芸大衆化」は文芸の低俗化と見えたのである。彼は書いている、「このように低級な形式に、優れた作品を生みだせるだろうか。確かに、連環図画からはトルストイ、フローベルは生みだされてはしない。このことを左翼理論家たちが知らないなどということがあろうか。彼等はそんなに愚かではあるまい」(關於『文新』与胡秋原的文芸論辯)一九三二年七月《現代》)と。魯迅は、左翼理論家が誤謬を犯し、杜衡が指摘したように、それを克服しえていないことを認めつつも、左翼文壇は克服しながら進軍しなければならない、「克服し、完成してから行進するなどという愚行はできない」と述べ、更にトルストイやフローベルは左翼作家にとっても必要であり、なるほど連環図画に彼等のような偉大な文学を生み出せる道理などないが、「思うに、ミケランジェロ、ダヴィンチのような偉大な画家を生み出すことはできる。しかも、唱本からはトルストイ、フローベルが生れうると私は信じている」と、通俗形式を政治宣伝に利用した作品を、専ら芸術的に無価値なものとして看做す杜衡に反駁、トルストイが農民向けの読み物を書いていること、今日その芸術的価値を誰も疑わないミケランジェロによって描かれたバチカンの天井画も、言わば「旧約聖書」の連環図画であり、一種の宗教の宣伝画であったと指摘した。「『連環図画』辯護」(一九三二年十一月十五日《文学月報》第四号)で短いながらも懇切な助言を後進に与えていることから窺えるように、魯迅は「文芸大衆化」の実績に決して満足していなかったに違いない。「『連環図画』辯護」は、彼にとって「文芸大衆化」が既成の通俗文芸の形式をそのまま用いさえすれば、いとも簡単に実現できるといったものではなく、古今、内外の書籍の挿絵やコールヴィッツ等の版画の研究をはじめ、文芸工作者の研鑽、修練なくして不可能であったことを示唆している。だが、言うまでもなく、それは同時に「文芸大衆化」という「無産階級革命文学」の課題を彼が真正面から受けとめていたことを如実に物語るものであった。

三十年代の魯迅の立脚点はトロツキーの文学観よりも、革命文学論戦以降に彼が大きな関心を示したルナチャルスキーのそれに近かったとする指摘がある(艾曉明『中国左翼文学思潮探源』一九九一年七月・湖南文芸出版社)。右に一瞥した「無産階級革命文学」の課題を担おうとするその姿勢を踏まえ

て考える限り、この指摘は傾聴に値すると思われる。ルナチャルスキーは、しばしばそのオポチュニズムが指摘される人物であるが、それはそれとして、コミッサールとインテリゲンチヤとの間のギャップに橋をかけようとした点では、トロツキーと立場を同じくしていた。だが、一九二五年二月にソ連共産党中央委員会の召集した文芸政策会議におけるその発言に見られるように、「プロレタリア文化」をめぐる考え方では、トロツキーと鋭く対立した。魯迅がこの会議の記録を外村史郎、蔵原惟人の邦訳『露国共産党の文芸政策』（一九二七年十一月二十五日・南宋書房）から重訳したことは、周知の通りである。確かに、「プロレタリア文学は我々の最も重要な期待として、我々はあらゆる手段をもってこれを支持すると共に、『ポポートチキ』も亦決して排斥してはいけない」とするルナチャルスキーの観点が、魯迅の「無産階級革命文学」との関わり方を説明する一つの手懸りとなることは否定できないが、それをそのまま魯迅の立場と看做すだけでは、些か物足りなさを覚える。そもそも、「同伴者」的な知識人とコミッサールとの懸隔を埋めようとしたトロツキーの試みは、その「プロレタリア文化」批判と不可分の関係にあったはずである。既成文化の最も基礎的な要素をロシア民衆のものとするための文化政策において、革命にあからさまな敵意を抱く者以外の全てのインテリゲンチヤの存在は依然として欠かせぬものであり、それ故に、トロツキーの目には、いたずらに「プロレタリア文化」を振りかざすことは、彼等をますますこの工作から遠ざける行為と見たのである。トロツキーの「同伴者」論と「プロレタリア文化」批判が一体のものであったとすれば、魯迅が前者だけを切り離して受容し、後者の観点は選択しなかったとする見方は、成り立ちはするだろうが、機械的にすぎることもやはり否めないだろう。

その存在意義を認めつつも、それが確立されるまでに、中国の「無産階級革命文学」の運動が克服しなければならない多くの問題を魯迅が見通していたことは贅言を要しない。「『連環図画』辯護」に暗示されているのは、たとえどんなにかけ声が大きくとも、多くの文芸工作者のたゆみない研鑽なくして、「無産階級革命文学」を自立させるに足る確固たる基盤を築くことなど不可能だということである。裏を返せば、「無産階級革命文学」の運動が既成文化の「基礎的な要素」を吸収しつつ新たな文学を育む土壌を民衆の中に創出するための研究と努力を軽視する時、トロツキーが指摘したように、それが「危険きわまりない小集团的倨傲」の温床となることを、魯迅は見逃してはいなかったのである。

いかにも下層の「民衆」が口にしような「性的」な背景を持つ罵詈雑言を

弄び、「無産者」を気取っている芸生の作品は、魯迅には「文芸大衆化」を考えられる範囲で最も低劣なやり方で実践したものと見えたに違いない。杜衡から嘲笑、揶揄された左連の「文芸大衆化」の方針を擁護すればこそ、なおさら魯迅は「漢奸的供状」のような作品を左連の雑誌が掲載したことを黙認しえなかった。トロツキーの『日常生活の諸問題』を踏まえて言えば、彼にとって、それは民衆の生活を「無知や迷信や奴隷状態」の所産である「忌まわしい言語模様で染め上げ」、野卑な罵言をあたりかまわず浴びせかけることによって自分自身を卑しめている民衆の「阿Q」的現実を容認するに等しいものだったのである。「たとえ人を罵りたがる無産者がいたとしても、それは悪い性癖にすぎません。作者は文芸を通じてそれを正していくべきであって…」という「辱罵和恐嚇決不是戦闘」の一節は、魯迅の言う「無産階級革命文学」が、左翼文学者の多くにとって、最早「ブルジョワ」的な「幻想」でしかなくなっていた五四時期の「啓蒙」運動の課題を包摂するものであったことを何にもまして雄弁に物語っているように思われる。《文化評論》誌上で五四の継承を主張する胡秋原を批判した「請脱棄『五四』的衣衫」（一九三二年一月八日《文芸新聞》第四十五号社説・無署名）をはじめとする《文芸新聞》の一連の論文の視点とは異なり、魯迅の「無産階級革命文学」において、未完の五四＝新文化運動によって残された課題は、依然として大きな意味を持ち続けていたのである。

「辱罵和恐嚇決不是戦闘」からやや時代が遡ることになるが、ここで一九二八年の魯迅と第三期創造社との論戦のよく知られた一齣を振り返っておきたい。馮乃超が《文化批判》創刊号（一九二八年一月十五日）に発表した「芸術与社会生活」に、魯迅を批判した「結局、彼が反映しているのは、社会の変革期において落伍した者の悲哀にすぎず、鬱ぎこんで、彼の弟（周作人——引用者注）と人道主義の美辞麗句を語らっているのである。幸い、トルストイに倣って忌まわしい説教者にはなっていないが」という一節がある。魯迅はこれ以下のように反駁している。

人に追隨してトルストイを「忌まわしい説教者」と呼ぶことを知ってはいても、中国の「目下の現状」に対しては、「事実、社会の様々な場において黒雲に覆われた勢力の支配を受けている」と感ずるばかりで、「政府の暴力、裁判と行政の茶番劇を暴露した」彼の勇気の何分の一すらもない。人道主義が不徹底であることを知っているが、「人を殺すこと草の如し声を聞かず」といった時に、人道主義式の抗争すらも存在しないのである。（『醉

眼』中的朦朧」一九二八年三月十二日《語絲》第四卷第十一期)

「忌まわしい説教者」,「政府の暴力,裁判と行政の茶番劇を暴露した」という言葉は,言うまでもなく,いずれもレーニンの「ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ」(一九〇八年)を踏まえたものである。ところで,トルストイを「忌まわしい説教者」と譏り,「プロレタリアートの世界観」=「弁証法的唯物論」を獲得せよといくら唱えてみたところで,「黒雲に覆われた勢力」に対する抵抗の地歩が約束されるわけではない。右の引用に続くパラグラフで,古参の創造社の成員でもあった成仿吾の左傾について,魯迅が皮肉をこめて「この飛躍は必然だったと言えなくもない。文芸にかかわる者は,たいてい敏感であり,いつも自己の没落を感じ,それを防ぎ,さながら大海を漂流している如く,必死になって手当たりしだい攫もうとするのである。二十世紀以来の表現主義,ダダイズム,あれやこれやの主義の盛衰は,実によくこのことを伝えている」と記したように,「弁証法的唯物論」を唱えることも,時代の流れから遅れをとるまいとする「知識人」の自慰行為の一つにすぎないとすれば,それがたとえどんなに「革命」的な理論であったとしても,無力であるという点で「人道主義の美辞麗句」と少しの違いもないし,ましてや,「政府の暴力,裁判と行政の茶番劇を暴露」した「忌まわしい説教者」の思想と行動に遠く及ばないことは言うまでもない。レーニンは「エリ・エヌ・トルストイとその時代」(一九一一年)で,そもそも「空想的」で,「反動」的な内容を持つトルストイの教えは,現在では明らかに有害であると結論しながらも,「だからといって,この教えが社会主義的でなかったとも,そのうちには先進的諸階級の啓蒙のために貴重な材料を提供できる批判的要素がなかったとも,けっして言うことはできない」と述べ,「四分の一世紀前にはトルストイの教えの批判的要素は,トルストイ主義の反動的な,また空想的な特徴にもかかわらず,実践においてときには若干の住民層に利益をもたらした」と指摘した。このレーニンのトルストイ評価を一つの喩えにして言えば,魯迅にとって,彼の前に存在する中国の現実,「革命文学」を掲げる創造社や太陽社のように資本主義の没落と社会主義革命を目前にした「社会の変革期」と呼びうるようなものではなく,むしろ「四分の一世紀前」のロシアに比すべきものではなかつただろうか。だとすれば,「人道主義式の抗争すら存在しない」当時の中国に必要とされたのは,トルストイを「忌まわしい説教者」と譏ることではなく,その思想から「先進的諸階級の啓蒙のために貴重な材料を提供できる批判的要素」を摂取することにほかならなかつた

はずである。このことを忽せにし、「トルストイ」を否定するほかに自己の「革命性」を誇示する術を持たぬ「革命文学者」の議論は、「弁証法的唯物論」をほかの誰も体得しえぬ彼等の中にだけ通用する秘教とし、その革命性を骨抜きにするものであった。トルストイを、魯迅をはじめとする五四時期の中国の「啓蒙家」に読みかえても、事情は変わらないだろう。

馮乃超と同じ第三期創造社の李初梨の「怎樣地建設革命文学」(一九二八年二月十五日《文化批判》第二号)の以下のような認識は、中国ブルジョワジーの政治的無力を理由にブルジョワ革命の思想的、文化的課題を軽視した「左翼」的観点を象徴するものであった。李は「欧州大戦後、帝国主義列強の魔の手は、再び東方の中国に伸びた。中国の資本主義の発達は、これによって再び停滞した。国内のブルジョワジーは、対外的には既に帝国主義列強と競争しえず、対内的には封建勢力に対抗しえなかった。かかる困難な状況において、彼等は生き残るために、やむをえず封建勢力に投降し、妥協したのである。彼等の革命的能力は、ここから失われた」と指摘し、真の「革命文学者」は「彼が以前抱いていたあらゆるブルジョワ・イデオロギーをきれいさっぱりと完全に克服せねばならぬ…」と主張する。こうした観点が、これ以後も再生産されたことについて、ここで多くの言葉を費やす必要はないだろう。《文芸新聞》社説の「五四のシャツを脱ぎ捨てる」という言い方も、そのヴァリエーションの一つにすぎなかった。しかし、ブルジョワジーの政治的無力は、ブルジョワ革命の文化的、思想的課題の意味を些かも軽減させはしなかった。むしろブルジョワ革命の不徹底は、それが達成しえなかった文化的、思想的課題をプロレタリアートの前にそっくりそのまま残したと言うべきであろう。確かに、魯迅は、五四の「遺業」=反封建を完成するということを当面する第一義の課題としプロレタリア革命を将来に委ねた胡秋原には同調しなかった。また、トロツキー流に「ブルジョワ文化の基礎的要素」の摂取を言ってもいない。だが、彼にとって、コミュニストによって革命の「ブルジョワ的段階」と看做された五四=新文化運動の積み残した課題が、シャツのようになややすく脱ぎ捨てられるものでなかったことは、もとより想像に難くない。換言すれば、未完の五四=新文化運動の課題に対する魯迅と左翼文学者の受けとめ方との間に、大きな差異があったことは否定できない。さすがに瞿秋白は、首甲らを批判し、「辱罵」をもって「敵」を攻撃することは「封建宗法社会の『文化遺産』の弱点を継承したにすぎない」と述べ、反「封建」闘争の重要性を強調しはしたが、専ら「ブルジョワ」的な文化や生活の習慣に対する憎悪を自己の「プロレタリア」的な党派性の証とするといった「左翼」

的心性（私の考えでは、瞿もそのような心性と決して無縁ではなかった）が強く働けば働くほど、反「ブルジョワ」闘争が、「封建」的なものばかりか、民衆の中に潜むより不条理な暴力とすらも吻合する危険性は増さざるをえないであろう。「漢奸的供状」は、ブルジョワ革命の思想的、文化的意味を忽せにした反「ブルジョワ」意識が孕むかかる問題を、おそらく魯迅すらも予期していなかったほどあからさまに露呈させたものにほかならなかったと言えよう。「辱罵和恐嚇決不是戦闘」のモチーフと、「ブルジョワ文化の基礎的要素」（例えば生活を「『理性』の要求にしたがわせようとした」十八世紀フランスの「ブルジョワ哲学者」の啓蒙思想）の摂取の重要性を説いたトロツキーの『文学と革命』のそれとが重なりあうのはかかる問題においてであり、両者は、はからずも中国とロシアの民衆が置かれた「希望も逃げ場もない奴隷状態」を反映した「忌まわしい言語模様」の観察を通して、「共産主義」的言説の行方を照射したのである。

\*トロツキー、レーニン、ドイッチャーからの引用は、下記の訳本を利用した。

トロツキー『文学と革命Ⅰ』（トロツキー文庫・内村剛介訳・現代思潮社・1969）『日常生活の諸問題』（『文化革命論』所収・和田あき子訳・現代思潮社1979）

レーニン 『文学・芸術論』上巻（蔵原惟人編訳・大月書店1969）

ドイッチャー『武器なき予言者・トロツキー1921～1929』（田中西二郎、橋本福夫、山西英一訳・新潮社・1964）